【論　文　提　出　者】　社会文化科学研究科　文化学専攻　文化資源論講座　有形文化資源論分野
大坪　志子

【論　　文　　題　　目】　先史時代の石製装身具の研究

【授与する学位の種類】　博士（文学）

【論文審査の結果の要旨】

大坪志子氏の論文「先史時代の石製装身具の研究」は、先史時代の石製装身具の中でも色や形において特徴の明らかな九州の縄文時代後・晩期の玉類を主たる対象として、その石材を理化学的方法で厳密に同定し、これを基礎に考古学的な検討をおこなって、その歴史的意味を論究したものである。

勾玉をはじめとする多様な石製装身具の使用は､縄文時代の装身文化の特徴の一つであることから、これに関する研究は多い。しかしこれらのほとんどは玉類の形状に関するもので、その素材に注目するものは少なく、肉眼観察による石材の報告には正確さを欠くものが多かった。大坪氏はこうした現状に疑問を抱き、石材を成分分析により正確に同定することから研究を始めている。氏は九州の縄文時代の石製装身具を集成し、ここから分析可能な 814 個を抽出して、蛍光 X 線分析の専門家に技術的な指導を仰ぎながら自ら分析を実施した。同様の分析は先行研究によって一部行われていたが、氏はこれに加えて遺物を X 線回折し、石材をより厳密に同定することに成功している。その結果、これらに多くのクロム白雲母が含まれていることが明らかになった。以上の分析でこれまでの石材についてヒスイや蛇紋岩としていた報告結果の多くは改められることになった。またクロム白雲母が変成岩帯に多く産出することと、クロム白雲母製品の出土集中地の位置を根拠に、氏は肥後変成岩帯をその原産地と推定している。

次に氏は、これらの資料の所属時期を特定し、時間軸に沿った変遷過程を整理して、石製装身具の編年を行った。その結果、縄文時代後・晩期における石製装身具の変遷を３段階に整理した。すなわち東日本の影響をうけて九州にクロム白雲母製の玉類が成立する後期後半、クロム白雲母を中心とする小型の組合せ式装身具が隆盛する後期末から晩期前半、韓半島系玉類が登場する晩期後半である。氏はクロム白雲母を中心とする組合せ式装身具を、その材質・形状・分布の限定性から九州型石製装身具と名付けた。九州型石製装身具が出土する遺跡には、クロム白雲母の原石や装身具の未成品が製品とともに残され、そこで玉類が製作された痕跡を残す場合がある。氏はこのことに注目して、玉類を製作した遺跡がもっとも集中する熊本地域を九州型石製装身具の主要な産地と見、肥後変成岩帯付近の石材原産地・玉類生産地・中継地・消費地をむすぶ運搬ルートを推定して、玉類の拡散モデルを示し、その時期的展開をのべた。

氏はかって九州型石製装身具の成立が韓半島の影響によると推定していたが､この自説を再検討し、それが韓半島との関係ではなく東日本の影響のもとに成立した可能性の強いことを､^{14}C 年代等のデータを整理して示した。また東日本に存在する九州型石製装身具が九州からの搬入であり、双方に文化的交流のあったことを、その石材の分析により示し、最後に、九州型石製装身具は九州縄文文化の精神的象徴として機能していたために、縄文時代終末期に韓半島から及んだ水稲農耕文化への社会的変化の中で自ら消滅したのではないかとして、その成立と終焉について考えを示した。

本論文は、出土した石製装身具を理化学的かつ悉皆的に分析してその素材を鉱物学的に特定し、混沌としていた九州縄文時代の装身具を整理して九州型石製装身具を抽出し、その成立と展開、終焉を描いた点で､考古学における装身具研究を大きく前進させている｡クロム白雲母の使用という新知見、装身文化における九州的なものを提示した独創性において、革新的研究と評価できる。

以上から、本論文を博士論文として適格であると判断する。

【最終試験の結果の要旨】

平成 23 年 1 月 14（木）午前 10 時、文学部応接室において、審査員６名の参加のもとに最終試験を実施した。最初に大坪氏が論文の概要を述べ、ひきつづき質疑応答をおこなった。応答は適切になされ、審査員は申請論文が学位を授与するに足るものであることを了解した。

よって、本審査委員会は、最終試験を合格であると判断した。

【審査委員会】

主査　木下　尚子
委員　甲元　眞之
委員　杉井　健
委員　小畑　弘己
委員　吉村　豊雄
委員　丹下　榮